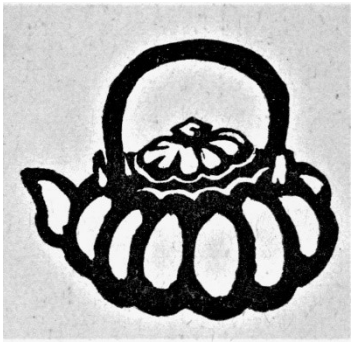

その三

猫

西側の板壁に貼った五六枚の子供の自由画は、私の殺風景な家の唯一の装飾だった。絵など貼るのは私の今までの習慣にはなかったが、貼って見て成程いいものだと思った。とくに子供の絵だったのがよかったのかも知れない。

――こうらくす、こうらくす、ぷれけけす――これはその絵の中でも一番大きいあやめの絵の上に書いてある蛙の鳴声だった。メーテルリンクの話に出て来る水の精の事を、私は何時か大家の娘達に話して聞かせたことがあった。その鳴声から、私はそれを蛙の化物として話した。中の娘は、その鳴声を覚えていたのだった。――ぷれけけつくす――と言うのを――ぷれけけす――としたのは、子供の記憶の舌足らずのためだったろうが、何かしら東北的な訛のような気がして、面白かった。ここにある絵はみんな大家の小さい娘達が描いたのを貰ってきて貼ったもので、このあやめの絵は、私がこれらの絵を壁に貼ると言ったので、中の娘が特別に描いてくれたものだった。私の家の中にあやめを植えて、蛙の鳴声を響かせようとしてくれたものだろう。私はこの絵を見るのが楽しかった。この絵のお蔭で私は孤独な気分から幾分免れることができた。そう考えるとこの蛙の鳴声が、まる

で幸福の呪文か何かのように思えて来るのであった。

大家には三人の女の子があった。私はこのあやめの絵を描いてくれた中の女の子を一番ひいきにした。上の子は小学校六年で、大人しい美しい子だった。下の子は末っ子らしく皆から可愛がられて甘やかされていた。それに比べて、何となく顔の引立たない中の子は、余り人に可愛がられなかった。中の子もそれを知って時々すねては人を困らせるので、傍の人から顔ばかりでなく根性も良くない子だと思われていた。末の子が、母親の膝に抱かれて

「うちのよし子はめんごい！」

と頬ずりされている傍で、中の子が畳の上にふんぞり反って、泣いて拗ねながら、母親の膝を蹴っていることがよくあった。

末の子は母親の膝の上から、幼い顔に露骨な優越感をみなぎらせて見下ろしながら、軽蔑するような口付きをして、母親と顔を見合わせて笑った。――焼きもちだっちゃ――中の子の拗ねた泣き声が何時までも止まらないと、笑ってばかりはいられないと言ったように、母親の声が段々とヒステリックに尖ってきて、しまいには手を上げて強く打った。いくら打っても娘は益々泣き叫んで、近所にも響き渡るような泣声を挙げた。こうなると母親は最後には根負けして、がっかりしたように坐り込んで、額を押えた。――どうしてこの子は何時もこうなんだろう――母親は疲れた目付きで、畳の上でバタバタしている中の娘の真っ黒な足の裏を見ていると、何時も最後に浮かんでくる言葉が口から洩れた。

「やんぱり父さんの子なんだあ、お前は……」

父親は酒好きで、酒を呑むと、好色やら嫉妬やら不満やら愚痴やら、理屈も何も判らぬ

風に何時までも言い続けて止まらないのが癖だった。そういう父親を、母親は白々とした眼で見ていた。彼女の頭の中ではこんな男との間違った結婚が、この家のすべての不幸と結びついていた。事毎にそう考え、子細な事にも不幸の本源を思うのは、自分の不幸を嘆く人間が不思議にも好んで尚一層惨めな気持ちになりたがる、あの傾向であった。また子供の悪癖に対して、父親似と言うのは非難の中に母親の側の利己的な自衛を含んでいた。酔うとわけの判らなくなる父親が、子供達の眼にもうとましく映っていたので、子供は父親似と言って父親側へうっちゃられること程悲しい事はなかった。ことに母親に好かれたくて堪らなくて、しかも三人の中で一番父親似である中の子は、それだけにこの言葉を蛇のように嫌った。或る時などは、母親から一寸冗談に、

「お父さん子！」

とからかわれただけで、今まで機嫌よかったのに、たちまち狂気したように泣き叫んで、物を投げ始めたこともあった。こうしてこの子は根性曲りとして通っていた。しかし私は、子供は可愛がらなければ可愛くならないことを知っていたので、そこに人々の気が付かない大きな不幸を見ているような気がしてきた。

この子が猫を非常に欲しがっていた。こういうものが好きなのも、自分が人に可愛がられたくて堪らないという気持の一つの反面だったのだろう。或る時、K先生のところに良い子猫があるという話をすると、この子は飛び上がって喜んだ。

「貰って来てけさい！すぐ。すぐ！すぐに」

と、せっかちに私の顎をゆすって、催促して止まなかった。私は、じゃあ今夜貰って来てあげる、と約束した。

私は夕方、食事をすませ、先生の家へ出掛けて行った。先生は炉辺の丸い卓に向って黙って飯を食べていた。険しい顔をして皿の上の肉を不味そうにつついていた。これは何時ものことなので別にとくに不機嫌というわけではなかったが、私としては何時もながらの取り付き難い気持ちで、黙って座って先生の肉を切る手つきなどを呆んやり眺めていた。如何にも不味そうに、見たところ腹立たしげに食べるのであるが、皿の肉は間もなくあらかた平らげてしまった。先生は肉がとても好きだった。一緒にすき焼きなどを食べても、我々に劣らずよく平らげた。肉の好きな人は頭が早く白くなるということだ。先生がまだそれ程の年でもないのに頭が真っ白なのはその所為ではないだろうか、などと私は先生の前にある空になった皿を見ながら思った。

その時、茶色の食卓の向う側に白い三角のものがおずおずと出て来た。それが向きを変えて、その下から猫のひくひくさせた鼻が現れた。猫は先に三角に見えた耳を後ろへ伏せて、眼を半分つむるように、今に打たれるか打たれるかと言ったようなびくびくした表情をして、まるで東北のこけし人形を食卓の陰から突き出したように首を伸ばした。猫はここまで体を現わしてまだ打たれないことが判ると、ソッと食卓の縁に前足をかけて立ち上がろうとした。香の物をとっていた先生はこれを見ると、矢庭に箸を持ちかえて、空いた右手の拳で猫の頭を発止と打った。眼にもとまらない素早い一撃だった。猫の頭蓋骨は、小さいながらも骨身にこたえたような音を響かせて、その白い姿は投げこまれたように食卓の下へ消えた。私はその一撃の猛烈さに吃驚して眼を見張った。先生は私の顔を見ると、今までの険しい顔を崩して、ニヤニヤと笑った。私はその笑顔でたちまち救われたような気持ちになった。この機会を捉えてと思って何か言おうとすると、先生は、

「君も、君も下手をすると、こうやられるんだぞ」
と言った。そして、この私が今のようにポカッとやられたところを想像すると、想像しただけで面白くて堪らないや、とでもいったように、喉の奥で、嬉しさを押えられないような笑い声を立てた。先生は私の仕事に不満がありはしないかと、平常気にかけていたので、こう言われた時、私は一寸ドキリとした。併しすぐ気持ちを立て直して、私もそう易々とやられるものですか、といったように、「ハッハッ」と一緒になって笑った。わたしは、その頃もうこういうずるい笑い方を覚えていた。

猫は諦めたように食卓の下を離れて、炉辺に来て前足を折ってうずくまった。そしてじっと眼をつむって丸くなった。その顔は諦め切ったようでもあり、恬然(てんぜん)としているようでもあり、叱り付けた側の者からいうとその感情的な不死身さに余計腹が立つようなところもあった。

これがこれから貰って行こうという子猫の母親だった。こういう不死身さも境遇によって生まれたのであるが、境遇のあまりよくないのは、無能な上に、毎年数匹ずつ処置に困る子猫を産む雌だというところからも来ていたから、この猫も人の世の片隅にいるだけあって、人間の女性の受ける呵責(かしゃく)や割の悪さに似た不幸を持っていたと言えるかも知れない。

子猫は未だ二匹残っていたが、一匹はもう行き先が決まっていた。残りの一匹を大家へ貰って行くことにした。子猫はお別れに牛乳を呑ませられて、古いバスケットに入れられた。お腹がくちくなったせいか、大人しくしていた。先生のところをお暇したのはもう大分暗くなってからだった。帰って見ると大家は戸を閉めて寝てしまっていた。起そうかどうしようかと思案したが、あまり遅い時間だし、明日の朝驚かせてやるのも面白いと思っ

て止めた。

家に入ってバスケットを縁側において、座敷の電気をつけると、今まで大人しくしていた猫が、急にあばれだした。そのままおけばミシミシとバスケットをこわして出て来そうなので、慌てて出してやった。猫は鳴きながらしきりに縁側や座敷を嗅ぎ回した。三畳の入口が開いているのを見ると、黙ってその方へのそのそ入って行った。しばらくして眼を光らせながらまた出て来た。私の傍まで来て一声高く鳴いた。私は可愛くなって、抱き上げて、自分の万年床の上に坐って、猫の顎の下や耳の後ろをこすってやった。寝る時になってバスケットに入れたが、猫はどうしても承知しないで、鳴いて暴れた。私は仕方なく、またバスケットから出して、寝床の中へ入れて寝た。猫は私と一緒に寝ると嬉しがって、盛んにゴロゴロやり出した。猫の体の何処がどう鳴るのか知らないが、私はまるで自分の顎にガクガクと響いて来るような気がした。こんな風に何時までもやられてはかなわないと思ったが、有難いことにその後十分ばかりで止めてくれた。猫もこれくらい感謝の意を表しておけば充分と思ったのだろう。私は間もなく眠りに陥ちた。

暁方と覚しい頃、猫がしきりにもぞもぞと動いて、布団から首を出したり、反対に奥の方へ入り込んだりした。やがて布団を出て行った。私は夢うつつであった。猫は暫くすると戻って来て床へもぐり込んだ。それも私は夢うつつに覚えているきりだった。その次に眼が覚めたのはもうすっかり明るくなってからだった。さめると共に鼻をねじ上げるような猛烈な臭いが部屋に満ちていることに気がついた。おやあと思ったが、すぐさてはと飛び起きて見た。矢っ張り布団の上に猫の糞がしてあった。布団の裾の凹んだところに、軟かい大便が、これが猫の小さな体から出たのかと思われる程おびただしくしてあって、小

便もそれに匹敵するほどその回りに浸みていた。もうあとの祭だった。
私は恐ろしく腹をたてながら布団の始末をして、有り合わせの目刺しと一緒に猫をバスケットに放り込んだまま、勤めに出掛けてしまった。
戻って来て大家へ行って見ると、子供達も家にいた。私の話を聞くと、中の娘は嬉しがって、奥の方にいた母親のところへ駆けて行った。しかし間もなく奥から内儀の顔をしかめたような声が聞こえて来た。
「おうお、猫なんか。やんだこと！（厭だこと！）」
中の娘は何かさかんにねだっていたが、何時ものようにてんで頭から問題にされなかった。私も内儀が猫嫌いだとは意外だった。内儀が嫌いではどうにも仕方がない。断念するより他はない。そうすると、早く返して来た方がいい。また昨夜のような事をされては堪らない。そう思って私は家に帰ると、すぐ、バスケットを下げて出た。猫はゆられて中でさかんに鳴いた。中の娘は忽ちそれを聞きつけて、
「猫！　猫！」
と叫んで家から飛出してきた。そして私の手から無理やりにバスケットを引ったくった。それを抱えて家の中へ入ってしまったので、私も仕方なしに、後から上がり込んだ。子供は猫をバスケットから出すと、抱き上げて頬ずりをした。
「俺ン猫だンおン！」
私はその有様を眺めながら、一寸どう仕様もなく困っていた。子供は猫を抱いたまま私の顔をのぞき込んだ。
「猫バ何処さも持っていきんすな！」

私が返事をためらっていると、子供は猫をバスケットに入れておいて、私につめよった。
「ええか！」
子供は、私の膝の上に跨ってのると、私の襟をつかまえて、一心な目付きをして駄目をおした。子供の埃くさい臭がして、習字の墨を付けた鼻が私の顔に近付いた。
「ええか？」
私は仕方なしにうなずいた。子供は私の承諾を確めると、じっと恐ろしい目付きをしたまま私の眼をのぞきこむようにしていたが、いきなり口端の生臭い臭いをさせて、私の鼻をペロリと嘗めた。私が吃驚して思わず身を引いて鼻をふくと、子供は黙って立上がった。バスケットを縁側の方へ持って行って、そこでまた猫を胸に高々と抱き上げながら、じっと私の方を見つめた。子供は何処かで接吻を見て覚えて来たらしい。その時私にそうするのが最上の感謝の表現だということも知っていたらしい。間違って鼻を嘗められたが、私はこの子供のひたむきな気持ちに激しく心を突かれた。私は黙ってそのまま家に帰った。
夜になると、この猫は女中がこっそりと返しに来た。私もそうなるだろうと思っていた。私は猫がバスケットの中で大人しくしている間にソッと持出した。外は雨が降っていた。猫はいい塩梅に門を出るまで鳴かなかった。私はホッとした。通りへ出ると猫は鳴きだした。すれ違う人々は、傘の下から吃驚したような目付きで私の下げたバスケットを眺めて行った。その往来で逢った人々の何人目かに、二人の若い娘が鳴き声を聞きつけて立止まった。
「あら、猫だわ！」
私は娘達が猫が好きそうなのを見てとって、欲しければ上げますと言って、猫を出して

見せた。
「可愛いい猫だわねえ。欲しいわねえ」
二人は顔を見合わせて興奮したように話し合った。
「いいわねえ」
「いいわねえ」
「貰っていきましょうか」
「でもおばさんにきかないと駄目よ」
「そうねえ」
猫が大分気に入ったらしいので、私は、お宅が近ければ善し悪しを聞いて取りに来て下さるなら、そこの角で待っています。と言うと、
「私達すぐそこですわ。じゃあ待っててて下さい」
と言って二人は足早に立去った。私は角に立って待っていた。二人はなかなか来なかった。雨がだんだん激しくなって、傘に当たる音が高くなった。雨の音で一層不安になったのか、バスケットの中では猫がしきりに鳴き続けた。私は眼の前にある雨樋の下の口から勢いよく流れ出す水を、呆んやり眺めたり、時々思い出したように雨の降りしきる通りをすかして見たりしながら、半時間以上も立っていたが、一向に娘達はやって来なかった。私は諦めて歩き出した。ビショ濡れになって歩きながら、猫一匹片付けるにも容易でないことを嘆いた。その挙句、この猫はどうせどうにか片付けなければならないのだから、先生のところへ返すよりもいっそのこと今夜何処かへ捨てて来てしまおうと決心した。
私はそれから一時間近く捨て場所を探し回った。随分歩き回って、もう雨がすっかり上

がってしまった頃、私は町はずれの薄暗い小路を歩いていた。黒い塀があって、片側の一軒の灯の明るい二階家から三味線がポツンポツン聞こえていた。私はここらが良いだろうと思って、その塀の傍の塵箱の横へ、バスケットを蓋が開くようにして置いた。十間ばかり離れたとこの物陰に隠れて見ていると、間もなく猫が蓋を押して出て来た。しばらくその辺を嗅いでいたが、私の方へは来ないで、塀にそって、塀を嗅ぎ嗅ぎよろけるような足どりで歩いて行った。塀は十五間ばかりあったが、猫はその端から曲って見えなくなった。私はホッとして、バスケットを下げて近くの大通りへ急いだ。そこからバスへ乗って帰った。

猫はそのまま、私の家にも先生の家にも、帰ってこなかった。

翌日私は中の子に大家の家の前で逢った。もう猫を捨てたことを知っていたと見えて、怒って追いかけて来て私の後ろを打った。その怒った顔には一寸返答の仕様がなく、私は黙って打つままにさせた。子供は一つ思い切って打っただけで、横を向いたままプイと家へはいってしまった。

しかし二三日するともうすっかり忘れてしまって、何時ものように、表で元気に遊んでいた。

【新風土（小山書店）　昭和十四年七月号】

80頁　メーテルリンク……モーリス・メーテルリンク、ベルギーの劇作家、『青い鳥』他

84頁　恬然……物事にこだわらず、平然としているさま

80頁　蛙の鳴声――こうらくす、こうらくす、ぷれけけす――のこと……

代表作『青い鳥』に登場する水の精は蛙の姿ではありません。「マーテルリンク全集（全八巻鷲尾浩訳、冬夏社大正9～11年発行）」にも蛙（の声）は見当たりませんでした。

似た表現の作品として、アンデルセンの童話『親指姫』（完訳アンデルセン童話集Ⅰ大畑末吉訳　岩波書店』）で、ヒキガエルが息子の嫁にしようと親指姫をさらった場面に、

「コアックス、コアックス！ブレッケ、ケ、ケックス！」息子の方は、やっぱりこれだけしか言うことができませんでした。

という表現があります。

巻末の注にアンデルセンが、（ギリシャの）アリストファネスの喜劇『蛙』の中の蛙の合唱から引用したと説明しています。

高橋健二訳、天沼春樹訳でもゲロゲロでなく、同じ表現を使っています。

アンデルセンの童話は、明治二十二年には初訳が出ていたそうですから、大家の娘達にオノマトペを交えながら、色んな「お話」をしてあげていたのだろうな、と想像できます。